

## 性愛と国家のホモロジー：『上海』戦争前夜の世界

栗崎，愛子  
九州大学大学院比較社会文化学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1495359>

---

出版情報：九大日文. 23, pp.57-65, 2014-03-31. 九州大学日本語文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 性愛と国家のホモロジー

——『上海』戦争前夜の世界——

KURISAKI  
栗崎 愛子

## 一 はじめに

一九二五年、租界都市・上海では、国家、思想、生活、性種が一所に混沌とひしめきあっていた。横光利一の『上海』（改造社版<sup>1</sup>昭七・七、書物展望社版<sup>2</sup>昭一〇・三）の世界は、種が種としてのアイデンティティや帰属意識を持つことが確たる意味を為さず、唯、すべてが物体として魔都の空間を埋めつくすように羅列される。新感覚派期の「文字」を物体化した横光文学の文体も、ちょうど上海の街並みに陳列される豚の頭や、鳥のように並べたてられ、人の身体も、その生も死も関係なく陳列された物体なのである。それは、皮膚の色、言語の種類、国家や性別、職業や主義・思想、人・動物・虫といった生物の種、生と死でさえも混沌としている。

このような『上海』における諸事物の混沌の意義を、小森陽一は記号内容から切り離された記号表現が、今や相互に記号内容から記号表現へ、あるいはまたその逆へと、無限に反転しあひながら象徴交換する言語空間が『上海』であると述べ、横光の表現の特色がただの「比喩」ではないことを強調している<sup>3</sup>。

しかし、小森は自身の論の中で「上海」というテキストの中の都市の（地）の部分の分析に終わり、〈図〉としての作中人物相互の「思想」的対話の分析にはとどかない<sup>4</sup>としている。

また、神谷忠孝が横光文学の新感覚派期の文体を「基本になるのは擬人法的手法」であると評したことは、もはや通説となっている<sup>5</sup>。これに対し中村三春は、「人間と物質との境界線成立以前の根源において、対象を生成しようとする強烈なディスクール」であると指摘した。そして、ジュリア・クリステヴァの術語を用いて、「意味論的な二項対立において現象を画然と定立する記号象徴態 (le symbolique) の次元に対して、未だ境界が不分明で混沌とした過程にある原記号態 (le semiotique) の次元が、テキストの表明に擬人<sup>6</sup>擬物表現と呼ばれるレトリックとして噴出したもの」と述べている<sup>7</sup>。そしてこのような『上海』というテキストの読解について、以下のようにまとめている。

また、『上海』というテキストにおいては、通常の意味での有機体的な作品としての全体性は問題にならない。都市・政治・植民地・恋愛・思想など、多くのキーワードからこのテキストを籠絡しようとする読解が示されてきたが、それらの要素はいずれも独自性を主張して雑然と拮抗するものの、どのレベルにおいても終始、断片的な要素としてのみ存在し、作品の代表権を与えることはできない。このテキストは、細部における諸要素の相互反発を引き起こし、全体に互る整然たる構造化を妨害し、諸要素の再拡

散を図り、(地)と(図)のゲシュタルト構造に支えられた統一な作品像を読者に与えることを拒否しているのである。

たしかに『上海』は統一な読解が困難なテクストであると思われる。しかし「描くこと自体の困難の他に、発表するそのことが困難」な情勢の中、「出来る限り、歴史的事実に忠実に近づいたつもりではあるが、近づけば近づくほど反対に、筆は概観を書く以外に許されない不便さを感じないわけにはいかなかった」といった横光の「読者の想像力に任す不愉快な方法さえ随所であつた」(昭一〇三、『上海』「序」書物展望社)という読み手へのメッセージを受け取る試みが必要である。一見、統一を拒否しているかのように見える構造をとつた『上海』は、細部の諸要素をイメージの次元や構造の次元でリンクさせ、バラバラなものを「読者の想像力」で統一し、昇華させるように仕組まれているのではないだろうか。

例えば横光利一の「性」と「愛」の問題について、伊藤整は以下のように述べた。

彼の人間観の中には、初期からあつた「愛」と「性」の問題の外に、社会構造としての人間の組み合わせの問題が、次第に発展してきて、中心的な場所を占めるようになっていた。その主題は、「上海」の中心主題であつた。(「解説」

『現代日本文学全集三六 横光利一集』昭二九・二、筑摩書房)

たしかに上海の中心主題は、「社会構造としての人間の組み合わせ」の問題であると言えよう。しかし一方、『上海』にお

いて「愛」と「性」の問題は依然として重要な位置づけが与えられているものと思われる。むしろ問うべきは、このような「愛」と「性」の問題と「社会構造としての人間の組み合わせ」の問題がどのような関係にあるかである。

これを考える上で、昭和七年の改造社版を経て、書物展望社版が昭和一〇年に刊行されたのち、横光は『欧州紀行』(昭一二・四、創元社)の中で次のようなことを記している。

ここでは貞操観念が失われているのではない。男が一人の女性を愛しつづける苦しさ、女が一人の男を愛する苦しさに堪えられず、どちらも楽しく、より長く相手を愛しつづけて得られるために、相互に愛人以外の男女を探すという手段。つまり互の中心を堅固にする方法として、他にそれ

ぞれの植民地を造るヨーロッパのごときものだ。  
ここで横光は、ヨーロッパ諸国がお互いの関係を堅固にするために植民地が形成されることを、男女が互いに愛し続けるために恋人以外の異性を求めることに重ねて説明している。ここから横光がまさに国家と性愛の関係をホモロジとしてとらえていることがわかる。

『上海』において、参木は「俺の身体は領土なんだ。この俺の身体もお杉の身体も。」と述べており、登場人物を通して「領土」という「国家」の問題が問われていることが考えられる。伊藤は「愛」と「性」の問題の外に」と述べているが、実際には「愛」と「性」の問題を用いて、「人間の組み合わせ」により「国家」の問題を考察しようとしていたのではないだろうか。

か。そしてここに『上海』における「性愛」と「国家」を結びつけて読解する可能性があるのでないだろうか。

例えば『上海』に次のような箇所がある。

襲撃された邦人の噂が、日々市中を流れて来た。邦人の貨物が掠奪されると、焼き捨てられた。支那商人が先を争って安全な共同租界へ逃げ込んだ。租界の旅館が満員を続けて溢れ出した。租界の地価と家賃が暴騰した。親日派の支那人は檻に入れられ、獣のように市中を引き摺り廻された。何者とも知れぬ生首が所々の電柱にひっつけられると、鼻から先に腐っていった。／参木は視察を命ぜられると、時々支那人に扮装して市中を廻った。彼は芳秋蘭を見たい欲望を压えることに、だんだん困難を感じて来た。彼は危険区劃に近づくことによって、急激な疲労を感じると、初めて鼻葉を盛られた鼻のように生き生きと刺激を感じるだけであった。(三・四章)

ここにある「危険区劃」とは、暴動により「親日派の支那人」が被害にあう場所であり、そのため日本人である参木は「支那人に扮装」して近づいていくとあるように、まさに「国家」に関わる言葉であると言え、四〇章、四一章の暴動の場面にも同じ言葉が見られる。しかし同じ「危険区劃」という言葉は第二章では、参木が宮子に近づく中で「ふと、参木は思わぬ危険区劃に侵入している自分に気がついた」と、「性愛」にまつわる場面で使用されている。「国家」と「性愛」の重なる「危険区劃」に参木は近づいたために「鼻葉(＝娼葉―栗崎注)を盛ら

れた鼻のように生き生きと刺激を感じる」のである。

本論では、このような『上海』における「性愛」と「国家」のホモロジーという問題意識のもと、視点人物である参木について考察することで、『上海』執筆時期における横光の日本に対する姿勢を明らかにしたい。

## 二 上海の中の参木

『上海』という場の意味について、次のような記述がある。どこの国でも同じように、この支那の植民地へ集まってくる者は、本国へ帰れば、全く生活の方法がなくなってしまう。それ故ここでは、本国から生活を奪われた各国人の集団が寄り合いつつ、全くここに落ち込んだが最後、性格を失った奇怪な人物の群れとなつて、世界で類例のない独立国を造っていた。(九章)

『上海』は「ここに落ち込んだが最後、性格を失った奇怪な人物の群れ」となる場として表象されている。これについて、田口律男は、上海というトポスのあいまいさ、遅れて近代化をとげた近代日本のあいまいさを指摘し、「国際都市・上海において、(日本人)としての(主体)を立ち上げることが困難であった」と述べている(『横光利一』『上海』論『都市テクスト論序説』平一八・二、松籟社)。『上海』とは、アイデンティティを喪失してしまう場なのである。

それではこの『上海』において参木はどのような存在である

と言えるのか。参木は「日本を愛さねばらぬ」と信じてきたし、「日本人だということを、別に悲しむべきことだとは少しも思っちゃおりません」と芳秋蘭に語った。しかし、抗日運動の高まりの中、参木は日本人としての自身を自問自答せずにいられた。参木が中国の工人に同情を持つのが、工人たちはマルキストと化し、日本に牙を向けるのだ。参木の「自分は日本を愛さねばならぬ。だが、それはいつたい、どうすれば良いのであるか」という台詞からアジアの中の日本人としての立ち位置の苦しさや曖昧さが垣間見える。

日本人というアイデンティティを真に追究するために、参木はヒリストとして設定されているものと思われる。その周りに資本主義の甲谷、「アジア主義」の山口、国粹主義の高重と、いずれも当時の日本に色濃かった思想を参木の周囲にちりばめた。そして、芳秋蘭という中国共産党のオーソリティとの恋という多少無理を感じさせる設定（恋愛に無理、という関係があるのかと云う問題は残るが）となっている。これは、「既成新進對抗の文壇（抄）」で横光が語った「早く云へば吾々は人形を書きたいんだ。最も理論的で形式的で魅力がある」「人形を書く方が、人間を書くよりも、よく人間生活が出し得られるし、つまりより形式化されて世界観がはつきりする」（初出『不同調』第四巻第三号、片岡鐵兵・林房雄らとの対談より、昭二・三、『定本横光利一』一三巻、昭五七・七）というこの実践であろう。このような人物構成に関して、片岡良一は『近代派文学の輪郭』（昭二五・一一、白楊社）で参木を次のように評している。

彼（参木―栗崎注）は彼自身の意欲を強く生き抜く勇氣と生活力とを持たない、完全な性格破壊者―分裂的な性格の持ち主なのである。（中略）動揺する空気を描き生かすための傀儡―やはりそんな意識があつたのかも知れない。

ヒリストとしての参木は「動揺する空気」の中、強固なアイデンティティを確立できず揺れ動き、横光の「傀儡」となっているのである。このような参木を明確に示すものが、参木をめぐる「性愛」の問題である。

趙峻は、「この恋愛相手の競子、芳秋蘭はそれぞれ「故郷」「本国」としての日本、身を置く中国としての存在を思わせる。」と述べている（『租界・人種・階級 横光利一「上海」が呈示する「未来の問題」』『名古屋近代文学研究第二〇号』、平一五・三）。たしかに、芳秋蘭は外国の侵略に抵抗し、「東洋的」な中国を貫きたいという中国そのものの表象、競子はアジアへ上り詰める日本の表象と読める。参木はどの立場で租界に身を置けばいいのか。いずれかの女性との関係を結ぶことは、参木がこの上海で立ち位置を決めることを意味するのである。

また上海から日本へ嫁いだ競子が、参木と日本人としてのアイデンティティをつなぐ架け橋の象徴となっている。そして参木の母は、日本という風土の中で、日本民族として生きる日本人であり、それは参木にとって、郷愁の象徴そのものとして位置づけられる。しかし、日本に居場所がない参木にとって競子すなわち本土・日本を引きずることは苦しみでもある。

参木は他の友人らのように上海に迷いもなく居座るほど割り

切れていない。日本紡績工場の現場で中国工人を使う立場の高重への問いかけにそれがよく表れ出ている。

(参木―栗崎注)「それであなたなんか、職工係りをやってらしつて、例えば職工たちの持ち出して来る要求を、これは正しいと思ふような場合、困るようなことはありませんか。」(中略)(高重―栗崎注)「いや、それやある。しかし、そこは僕らの階級の習慣から、自然に巧い笑顔が出て来るんだ。僕はにやにやとしてやるんだが、このにやにやが、支那人を征服する第一の武器なんだ。これは虚無にまで通じていて、何んのことだかわからんからね。うっかりしている隙に、後ろから金を握らしてまたにやにやだ。それで落ちる。所が、こんどの奴だけは、いくらにやにやしたつて落ちないんだ。こうなると、こつちが正義に打たれて、もう一度にやにやとは出来ないからね。」

参木は高重のように割り切ることができない。しかしそんな参木に対して高重は「君、この工場を廻るには、鋭さと明快さとは禁物だよ。ただ朦朧とした豪快な二ヒリズムだけが機関車なんだ。いいか、ぐつと押すんだ。考えちゃ駄目だぞ。」と述べるのである。

参木は高重のように上海における日本人の在り方を割り切れないまま、上海での自身のアイデンティティを問い続けることになる。参木は中国について複雑な心境を持っていた。「彼は、支那の工人には同情を持っていた」とある。しかし、日本人の苦しい立場も見せる。

―もし母国が、此の支那の工人をつかわなければ、―彼に代わつて使うものは、英国と米国にちがいない。もし英国と米国が支那の工人を使うなら、日本はやがて彼らのために使用されねばならないであらう。(二三章)

参木の揺れはまさに近代化を遅れてとげた日本の、世界における立ち位置の「あいまいさ」に根ざしたものであると言える。ここに登場人物を「傀儡」として配置する横光利一の日本への問いかけが浮かび上がるものと考えられる。

### 三 参木の自殺願望をめぐつて

ここまで「上海」における参木のアイデンティティの喪失を考察してきた。しかし、日本人であるはずの参木が本場に「上海」という都市において、「日本人」というアイデンティティを失うことなど可能なのであろうか。

上海の日本人は、本土と離れており、上海租界という特殊な土地から日本人(本土)としての意識(絶対的)を喪失している。しかし上海租界には英米仏租界があり、中国があつて、街を歩けば、他者にとつて、まず個人(私)である前に日本人(公)である。これは、日本にいるよりも日本人だと意識する環境であると言える(相対的ではない)。

その二つの光景の間を流れた彼の時間は、それは日本の肉體の時間に違いないのだ。(三五章)

ここに、日本人という言語記号が持つ意味内容のねじれが顕

著に表れ出ている。日本人という肉体は、日本という国、風土の中にいる日本人であることが自然であるとしても、上海で生活する日本人もまた、日本人であるのだ。これは、日本にいるよりも日本人だと意識する環境にあるといえる。日本人であることから決して離れることができない。参木は、日本の土を踏みしめることが出来ずとも、「彼の肉体は外界が彼を日本人だと強いることに反対することは出来ない。心が闘うのではなく、皮膚が外界と闘わなければならぬのだ。すると、心が皮膚に従つて闘いだす」のであり、日本人というアイデンティティは思想を超えて肉体レベルで離れることができない。

ここで参木の抱える自殺願望について考えてみたい。この自殺願望は、先ほどまで考察してきた参木の立ち位置と無関係のものではない。先に参木は横光の傀儡として「ニヒリスト」として設定されていると指摘したが、このような参木の「ニヒリスト」としての虚無感と死への願望との関わりを見てみよう。作中、参木の虚無感と感情の隆起が繰り返されるが、三、四章において、それはまるで閃光のように激しく、短く交差する。三、四章についてみていくと、次の表現がある。

彼は激昂しているように、茫然としている自分を感じた。同時に彼は自分の無感動な胸の中の洞穴を。——遠くの窓からガラスが滝のように落ちていた。彼は足元で弾丸を拾う乞食の頭を跨いだ。すると、彼は初めて、現実が視野の中で、強烈な活動を続けているのを感じ出した。しかし、依然として襲う淵のような空虚さが、ますます明瞭に彼の

心を沈めていった。(傍線栗崎／二重線は虚無感の表現、太線は感情の高ぶりの表現である。)

三、四章と一章について比較してみたい。

彼は最早や、為すべき自身の何事も無いのを感じた。すると、幾度となく襲つては退いた死への魅力が、煌くように彼の胸へ満ち始めた。(三、四章)

いつの間にか、だんだんと死の魅力に牽かれていった。彼は一日一度冗談にせよ、必ず死ぬ方法を考えた。それが最早や、彼の生活の、唯一の整理法であるかのように。(中略) 参木に赦されていることは、事実、ただ古めかしい幼児の事を追想して、涙を流すことだけだった。彼は泣くときには思うのだ。——えーい、ひとつ、こころあたりで泣いてやれ。——。(二章)

一章と三、四章における虚無と感情の高ぶりの反復の特色には、三、四章の群衆の、洪水のようなエネルギーに満ち溢れた場面状況から決定的相違がある。参木は一章において、感傷を起こすのに、自分自身を「こころあたりで泣いてやれ」とコントロールしなければならなかった。つまり、意識的に感情を生みだしているのである。しかし、三、四章では「初めて、現実が視野の中で、強烈な活動を続けてゐるのを感じ出した」という、自然発生的な感情なのである。一章では、「冗談にせよ」「彼の生活の、唯一の整理法」としての死が頭に浮かび、その後「泣く」という感情を起こす。対して三、四章では、自身の感情を引き出

そうとするコントロールをせずに、ようやく「初めて、現実が

視野の中で、強烈な活動を続けているのを感じ出し、そして、「死への魅力が、煌くように彼の胸へ満ち始め」るのである。

三五章において参木は、緊迫した状況の中で、これまでの上海の生活の中でなぜ死ばかりを考えてきたのか、その原因を体感することになる。一章より見せた、曖昧で鬱々とした参木の自殺願望、「死」は、三四章の虚無感と郷愁という感情の起伏とのフラッシュバックの後に、その正体を明かす。

此の民族運動の中で、しかし、参木は本能のままに自分に自殺を決行しようとしている自分に気がついた。彼は自身をして自殺せしめる母国の動力を感じると同時に、自身が自殺をするのか自分が自殺せしめられるのかを考えた。しかし、何故に此のように自分の生活の行くさきざきが暗いのだろうか。彼は自分の考えることが、自分が自身で考えているのではなく、自分が母国のために考えさせられている自身を感じる。最早や彼は彼自身で考えたい。それは何も考えないことだ。彼が彼を殺すこと―(三五章)

異国へ向かって暴徒と化した強烈な中国のアイデンティティの前に、彼は自分に死を思わせてきたものが、「母国」日本であることを悟る。参木は中国における侵略者としての「日本」の一員であることを受け入れられない一方、日本人であるというアイデンティティから逃れることはできないのである。

#### 四 「支那服」と男装

このようなナシヨナル・アイデンティティを、参木は越境することを試みていると考えられる。それは、暴動の中で「支那服」を着た参木、「男装」した芳が擦れ違う場面にある。参木は「支那服」を着ることでナシヨナル・アイデンティティを越境しようとし、芳は男装することで性別を越境しようとした。

彼らはモードの体系を通して、越境し、恋をする。「政治」と「恋愛」のホモロジーがみえる。「あのお杉、此の宮子、そうして、あのお柳とあの支那婦人の芳秋蘭―何と女の変化の種類も華やかなもの」だとする上海の中で、参木は「いかなる整理法で身を清めていくべきか。彼は何よりも古めかしい道徳を愛して来た―し、「此の支那で、性に対して古い道徳を愛することは、太陽のように新鮮な思想だ」と思っている。このことと、上海において肉体が国家の領土であるとする思想のもと、参木が「正義」が何かを問うて立ち位置を決められずにいる構図はリンクする。そして、彼にとつて「彼の生活の、唯一の整理法であるかのような自殺願望は、国家の問題と性別の問題に繋がっている。「性」と「国家」というそれぞれの領域において、侵略し、侵略され、魅かれ、軽蔑する、という行為は繰り返されている。「支那服」を着ても、日本人は中国人にはならないし、男装しても、女は男になることは不可能だ。相容れない国民国家間と相容れない男女の関係。別種の越境は不可能なのである。だからこそ、強烈に関わり合ってしまうのである。



『上海』を描いたのには、刻一刻と様相を変える世界情勢に国家の問題を、個人の問題として捉えていた日本人としての横光利一があつたからだといえる。「支那服」を着た参木は、「自分の考えることが、自分が自身で考えているのではなく、自分が母国のために考えさせられている自身を感じる。最早や彼は彼自身で考えたい。」と願ひ、ドン・キホーテの思い姫にあたる競子への思いを払拭できるほど抗日の核である芳に魅了された。ここから、参木が母国日本の、世界における在り方に抵抗を感じ、中国との関係が望まぬ方向へ進んで現実に戸惑つていくという可能性がいえるのではないか。「愛の問題」は国境を越えようとする。しかし、肉体を持つ限り母国は越えられない。肉体が「死」にいたるまで、それは「国家の領土」であり続けるのである。

英国の圧倒的な軍事力をもつて歩んできた帝国主義の道、侵略されたインド、侵略されてゆく中国。日本は、帝国主義化することで自国が植民地化されることを免れたが、しかしそれは、東洋を虐げることと等しかった。横光利一は、参木という「傀儡」で侵略・被侵略の狭間で揺れる日本人のアイデンティティを、恋愛、もしくは性愛と国民国家間におけるホモロジを通じて表現したのである。

しかし、一方で、参木がこの暴動の以前にすでに侵略的立ち位置の中に自らもまた存在することを無意識に自覚している。それが表れている箇所を見ておきたい。

「人間の幸福というものは、不幸な奴がいるからこそ、幸福なんだ。われわれは不幸な奴まで幸福にしてやる資格なんて、どこにあるんだ。人間は人を苦しめておればよろし。俺が俺のことを考えずに、誰が俺のことを考えてくれるのだ。(中略)／と、人気のない庭の出口の土間の上に、支那人が殺されたまま倒れていた。二人は立ち止まった。転げた西班牙ナイフの青い彫刻の周囲で血がまた静かな活動を続けていた。甲谷は死体を跨いで外へ出ると、参木にいった。／「どうも、飛んだ邪魔者だね。問題はどこだったのかな。／参木は今甲谷の虚栄心の強さに快感をかんじて来た。／「君はその手でマルキシズムをやっつけようというんだな。」／「そうだ。あんな死人を問題にしていちゃ、マルキシズムにくわれるだけさ。」(二七章)

西欧のナイフで刺された中国人を跨いだ日本人の姿に、快感を感じているのである。「古い道徳」を愛し、中国工人に同情を抱く参木であつたが、職を失ひ、日本という国家の力を頼らざるを得なくなつた参木の中には、暴動の前段階で、すでに当時の日本という侵略性を持った国家の一員であることが窺える場面もあることは重要である。

## 五 むすび

本論では、視点人物である参木に着目し、『上海』執筆時の

横光の日本観の分析を試みた。参木は国家という意識から逃れようとするものの、それは肉体がある限り捨て去ることができないことを描いている。参木の葛藤には、横光が中国あるいは世界に対する日本の姿勢に違和感を覚えていたことが窺える。横光佑典は、父利一についてつぎのように振り返っている。

「中国には、日本人の及びもつかないほど立派な人がいるのに驚いたよ」と、あるとき父がこういうのを聞きました。幼いころのことでしたが、聞いた私は飛びあがらんばかりに驚きました。何しろ時代は、国をあげての中国蔑視のころだったからなのです（横光佑典「序」（井上聡『横光利一と中国——『上海』の構成と五・三〇事件』平八・一〇、翰林書房）。

戦後、激しい批判をあびて横光はこの世を去った。しかし、戦前期に描かれた『上海』という、新感覚派期のレトリックを駆使した、一見読みづらいともいえるテキストの中に、紡ぎ合わせれば表れ出てくる横光の日本観が見えはしないか。

戦後、国粹主義者としての側面が注目された横光利一であったが、戦争前夜を描いた『上海』においては、必ずしも日本を肯定する立場であったとはいえないのではないか。

※本稿における横光利一『上海』のテキストはことわりがない限り、『定本横光利一全集 第三卷』（河出書房新社、昭五六・九）による。

なお、旧仮名づかいを現代仮名に改めた。また、引用する際にはルビを省略した。そして、差別的ととられかねない表現は作品の歴史性を鑑み、原文通りとした。

#### 【注記】

- 1 小森陽一「文字・身体・象徴交換——流動体としてのテキスト『上海』——」（『構造としての語り』昭六三・四、新曜社）
- 2 神谷忠孝「国語との不逞極る血戦時代——理論と実践——」（『横光利一論』昭五三・一〇、双文社）
- 3 中村三春「はしがきに代えて——テキストの様式論とレトリック分析——」（『修辭的モダニズム——テキスト様式論の試み』平一八・五、ひつじ書房）

#### 【付記】

本稿は二〇一三年日本近代文学会九州支部秋季大会（二〇一三年一月、於佐賀女子短期大学）において口頭発表を基に執筆したものである。会場でご意見をくださった方々に、この場を借りて感謝申し上げます。

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程二年）